

市民主導の街づくりにむけて

21.07.16to

1.はじめに 1.1 目的 街づくりには専門家が携わるものと全く市民(地域民)だけで運営していくものがある。街づくりの規模や生産活動の面からみると、前者については中心市街地活性化や観光地域の街づくりのように割合大規模で重要度の高い場合が多く、後者は割合小規模であり、住民だけの生活の延長での街づくりとしている。本稿では、街づくりにおいて市民主導のあるべき姿を見出すために、市民生活に着目して街における意識とともにコミュニティづくり事例を検討する。

1.2 本稿の視点 人のかかわりを前面にした市民主導への思い。
・街をもっと広げて、人にもっとスポットを、談義に華を咲かせ。
・街を超えて広がっていること、そこにはコミュニケーション(コミケや談義とも言換え)があること、人に着目なら「人のなすこと、なせること」、とする。
・楽しむ、居す、繋がる(関わり、縁)があると考える。
これより、街のイメージとして「人が行き交い、話声に包まれる街」がピッタリかと思っている。なお、人は生活圏において健全な生活を営むことが大前提である。
・市民主導の街づくりには次のようなものもありとしたい。
広域にて風土や気質を反映させ、住民の日常の延長や意識の延長上にて、
・古い家活用としてのコミュニティ活動。
・街の息づかいなるコミュニケ(談義)活動。

2 市民の街に関する意識、市民主導における市民の思い

2.1 市民の意識 街について、日常には市民意識が高くなくみえることが多いのは、市民が街づくりには無縁ではなく、いい街はあって当たり前とするからであり、仮に生活環境が悪化となれば改善のための市民運動で頑張るのである。こう考えれば、市民の意識改革を叫ぶ(一部)専門家の考えよりも当たり前感覚をどう形にしていけるか、その役割を担うのが市民主導といえる。

2.2 街についての市民感覚 街という空間と時間、人とのかかわり

(1)街の広がりについて、街と街の間をどう考える

・街と街の間は田園もあれば、隙間なくびっしりの街もあり
・都市では切れ目なく延々と街が続く。歩いて行ける場所(生活圏)が街であり、車や電車での移動中の領域は街間ともいえる。
・街は広域と共に。広域から街へ、街から広域への関わりあり。

(2)街の歴史、街の重み(ポテンシャル)

・有名な史跡や観光地では歴史を楽しむが、どこにでもあるような卑近な歴史は「当たり前」という感覚のもとでは歴史にあらずの認識がある。日常的に歴史を意識化することが少ないから。
・街を構成するそれぞれの建物での生活の充実が町全体の住まい文化を定着させていることも当たり前感覚であったとしても、街の認識はできていく。この住民の思いが集積され、街の歴史や文化と相まって、街の重みとなっていく。

(3)街というコミュニティには、日常の縁あり

毎日顔をあわせて、袖すりあうも縁、何につけてもコミュニティ。
人間関係希薄化や諸々の関係断絶傾向が生活するうえで楽と

いう考えが多いなかでも、多様で個性的な関係性は求められている。以下に関係性からのコミュニティの様相を記す。

- ・多少の縁もにわか縁もコミュニティに。観光地でも。
 - ・自分の居場所(街)からの延長で他の街や広域あり
 - ・各種コミュニティとは関係なくてもあって当たり前前感があり
 - ・何かとかこつければコミュニティ。コミュニケーションのコミュニティ、等
- (4)風土といえばあって当たり前前
- ・風土は気質や意識にしっかりと反映されている
 - ・広域の自然や歴史、人的環境も街に色濃く反映
 - ・古さと新しさで歴史を感じ、風景からは自然環境を感じ

3. 街の捉え方

(1)街の捉え方 街 = 人 + 建築 + 土地(環境) + 風土・歴史

街は人と一体となったコミュニティの総体であるが、ここでは、ものの世界(街や広域)と人の世界(人的環境)に分けてみる。

(2)街の広がり：
・広がりとして、地縁として、生活圏としての街はあくまでも息づかいが感じられ、それこそ「人が行き交い、話声で包まれる街」が基本となっていく。

・基本的街がそれぞれに結合されればより大きな街になる。こうしたいくつもの街が交通路で結ばれ、そしてネットが幾重にも構成されたものが都市、ということにもなる。

(3)街並み雰囲気：街には、商店街、行政集積地など核(拠点)による雰囲気と居住地における同質の様相の雰囲気とがある。

(4)人の繋がり：
・生活圏には身近な生活圏と(より広範囲な)行動的な生活圏の二種を考えることで街と広域とでのつながりが意識化できることを主張したことがある。
・今回の指摘は；多様な人同士の自由なつながりが街に人的環境を持ち込み、街そのものが奥みを増すこと。これが市民主導の根幹となること。実際には(街づくり行動とは直接結びつかない)談義(コミケ)の場において市民のつながりが形成され活力となっていること。

(5)街の複相性：街中でも広域においても、地縁コミュニティとしての街に広域からの関係縁なるコミュニティが繋がる。

(6)街の重み、人と街の繋がりとして：街そのものには、街を含めた広域の風土のもとで過去から積み上げてきた歴史がある。これに加えて、住民もまた住民歴史を育ててきている。これらを合わせて、街の重みといえる。ここでは街の重みとして以下を記す。
・環境(風土)の重み

・創生される重み：町衆の意識見識良識)

・町衆の種々関係性からの活力 ・民衆生活の歴史

4. 仕掛け人主導の街づくりとの違い

(1)仕掛け人(その道の専門家)主導では、住民の街づくりへの意思の尊重としてWSが位置づけられ、好評価を得ている。

(2)仕掛け人が主導となることによる不都合とは。仕掛け人は、住民と共に歩むといった悠長さが許されないことが多いためか、プロ意識での(効率的な)行動に走りがちといえる。

(3) 仕掛け人は、目的遂行が第一になりやすく、住民の日常やその延長(生活延長)という視点を考慮しにくいといえる。

(4) 住民主導での街づくりでは、のんびりした生活の延長で街の領域まで取り組んでいくことが可能である。

5. 具体的な問題と取り組み

広域の街の形成と歴史、古い家の活用、コミュニケーションの場、について、地元民が良好なコミュニティをつくっている。以下にみよう。

5.1 風土と街と意識： 広領域の場合、街の捉え方やその歴史についても民衆の思いがこもっている。

富山県東部域(新川)では、滑川、魚津、黒部などの街があたかも兄弟のような(街の)様相を呈している。これは、地形条件が地域全体で同じであることにより、街の広がりや生業を含めた街の営みが似通っていることによるものである。加えて、街の歴史は広域な地域の歴史そのものであり、空間の広がりとともに時間的広がりも、街の構成に大きく関与している。これが広域に根差す越中人気質へとつながっている。

5.1.1 地形的特徴： 新川域は山と海に囲まれた狭带状域である。街・河川・扇状地が一組になり、これが横並びとなって、一帯一路(街道)の様相を呈している。生業はもともと農業と漁業であり、互いに隣接する海と山により、山からの豊富な水が農業を、深い海が沿岸部に漁場となって漁業を賑わせている。

5.1.2 近世近代の歴史的特徴： 富山人気質のひとつである民衆行動について街の財産となっている抗議行動歴史がある。

- (1) ばんどり騒動 1859 年； 大規模農民一揆、新川域にて、一揆隊は総勢 2.3~5 万人、年貢減免と農業政策改善要求、舟橋村から泊までの 40-50km の大規模デモ。進撃路周辺の富豪や十村を襲撃。騒動の原因は加賀藩出先の怠慢。指導者一人のみ処分。
- (2) 米騒動 1918 年； ・コメの投機買占めで米価高騰。新川の主婦が立つ、コメ積み出し阻止。→新川全体が動く→全国にも
・抗議行動：近代日本の民主主義の原点と評価。米の買い占め、米価の不当つり上げに抗議。暴動ではなく社会運動そのもの。救済事業有。処分者なし。全国に飛び火し暴動発生。
・地域意識；指導者なし、自然発生的、広域に同時多発。

5.2 古い家のコミュニティとしての活用

5.2.1 そもそも古い家の役割とは、使われ方とは。

古い家については博物館としての展示やイベントの会場としての役割が多い。また街の賑わい創出として伝統を売りとした商業的使われ方も多い。それとは別に地域の方々や周辺域の方々によるコミュニティの場として賑わいに努めている古い家もある。

5.2.2 北陸街道滑川宿の旧宮崎酒造を拠点に

・滑川宿には 6 軒の伝統的建造物が残っており、これらを「保存は活用」として地域民のみで守っている。拠点における蔵カフェを地域民による日替わり運営(今は特定の方による運営)で支え、拠点をご近所さんが見守り、時には常駐している。イベントにも地域民総出で賑わいをつくっている。

・例えばひな祭りイベント。地域の各家庭に眠っているひな人形を拠点に持ち込み一堂に展示。会場は、数多くのひな人形で地域民の思いが満ち満ちている。この他、地域及びその周辺の方々が参加の美術展を伝統空間において開催し、芸術家・愛好家と地元や周辺の方々とのコミュニティを形成し楽しんでいる。

・平時の場合。訪問者が少なくても拠点内のカフェが賑わっている。またそうした雰囲気魅せられた方々が当該宿場において古本

屋、玄米食堂、軽食カフェなどで軒を連ね、大学研究室や企業などの団体が共同で運営する町家の研修所もあって、街が息づいている。

5.2.3 山村の古民家を拠点に

・古民家は、多くは博物館や飲食店であるが、コミュニティの場のものもある。第一の博物館の場合、雇われ管理人が多いためか、古民家には人の気配を意識することが少ない。その点、第二の飲食の場合、そこに人がおり、賑わいが地味に創出されている。
・第三のコミュニティの場合、古民家という空間でコミュニティをつくり、素朴な時間空間を堪能し楽しむのである。例えば富山県大岩にある古民家があり(アニメ「おおかみこどもの雨と雪」の舞台モデル)、そこでは自販機なし、TV・BGM なし、携帯電話不通(現在は保安のため開通)、といった文明の露骨さを感じさせるものではなく、あるのは当たり前自然の風景、樹木や花、などであり、何よりもご主人・スタッフとの会話を楽しむことができる。訪問者は、若干不便な立地のためか、自然愛好、アニメファン、好奇心旺盛といったこだわりの方々が多く、コミュニティはそうした方々とでつづられている。しかも、彼らには自分らが住むコミュニティとは別に自然愛好のコミュニティをここに求めている(サテライト自然コミュニティである)。なお、有人管理・常駐のゲストルームやゲストハウスについてはコミュニティの範疇に入れておく。

5.3 コミュニケーションのコミュニティ

住まう人にとっては、住まう意識をどう育んでいくかも併せて考えたい。これには、いきなり「住まいとは、コミュニティとは」ではなく、日頃の生活の延長として特にコミュニケーションの場がコミュニティというように考える。例として富山県内のコミュニティに着目。

5.3.1 街へのかかわり(ポテンシャルづくり)

街内での交流や教育の場としては家庭や地域や周辺域、職場などがあり、とりわけ街中や周辺域にて展開のコミュニケーションのコミュニティもまた街・広域を支えている。そこでは人的交流や知的ポテンシャルが人間力向上ひいては街のポテンシャル向上につながっている。

5.3.2 コミュニケーションのコミュニティ

県内には多くの勉強会や交流の場があり、カフェや朝活と称されている。関心ある方々は自分にあつた場に常連として何回も出かけている。こうした日頃何気ない交流や談義が直近の関心を満足させるとともに、街へのかかわりを増すように向くといえる。大枠でコミュエの場を分類する。学協会や行政主導は含めず。

自由な雰囲気：朝活、カフェ；富山等の朝活、哲学や街中などカフェ

対象限定した場：カフェ、研究会・勉強会；

分野については：哲学、社会科、憲法、歴史、他

街づくりの分野がまったくないのは街づくりの前に個人の素養向上を目指すため。また勉強会には社会系のものに運動体が多い。

6. まとめ： 市民主導の街づくりの在り方について、街を広げ、人に注目し、談義に華を咲かせるといった市民感覚で検討して、さりげない市民主導の必要性を明示した。次につなげたい。